

英語に対する興味・関心を持ち積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成
～Information Gap を取り入れた活動を通して～

白河市立小野田小学校 教諭 荒井 智

1 研究の趣旨

私自身、今までの外国語活動の実践において、「子どもたちが英語に慣れ親しむ」「中学校に向けて英語嫌いをつくらない」ことを大切に、まずは「音声」を中心とした「子どもたちが楽しめる活動」を展開するよう努めてきた。

しかし、実践を進めるにあたり、いくつか反省点が浮かび上がってきた。

1つ目は、学びの楽しさの質についてである。「楽しさ」を追究するために、インタビューゲームなどを取り入れ実践してきた。しかし、ゲーム自体を楽しんでいるものの英語を使ってコミュニケーションができる楽しさを十分に味わっていないのではという疑問がわいてきた。

2つ目はコミュニケーションの必要感についてである。単語やセンテンスの練習の際、教師の言うことをそのまま口真似で繰り返すといった機械的なパターン練習や、「What's your name?」「My name is ○○。」などあらかじめ質問内容や答えが分かりきっているコミュニケーション活動（エクササイズ活動）で、果たして本当のコミュニケーション能力が身につくのだろうかという疑問もわいてきた。子ども同士英語で会話をしているのに、英語を通してコミュニケーションをしているように見えるが、子どもたちの口から出てくる英語は、実は子どもたちが本当に言いたいことではなく、教師から与えられたものになっている。つまり目的意識や必要感を持って友達と話ができていないのではないかと感じるようになった。

このような課題を解決するために、「Information Gap」という手法を含む教材を研究開発し、実践してきた。「Information Gap」を用いることで、活動の中で一方が知っている情報をもう一方が知らないという状況を作ることができる。こうすることで、相手はどんな情報を持っているのだろうかという興味や関心を高めることができる。

さらに、この取り組みをより効果的にするために授業時間における「帯学習」と「メインアクティビティ」による授業構成を工夫するとともに、個に応じた評価も含めて研究にあたりたいと考えた。

研究仮説

「帯学習」と「メインアクティビティ」による授業構成を充実させ、情報交換の必要性のある「Information Gap」を取り入れた活動をすることにより、積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童を育てることができるであろう。

2 研究の概要

- (1) 「帯学習」と「メインアクティビティ」を用いて授業構成を工夫する。
- (2) 「Information Gap」を取り入れた教材を開発する。
- (3) 個に応じた効果的な評価を工夫する。

3 成果と今後の課題

(1) 研究の成果

事前・事後アンケートを比較すると、全ての項目で良い評価をする子どもが増えている。特に、具体的な活動については「他人と積極的に関わる」といった項目が改善され、また児童が感じる喜びでは「英語で友達に伝えることができたときのうれしさ」の項目などが伸び、実践の成果が見られた。

(2) 今後の課題

担任単独の授業、担任とALTの授業等における様々な形態における活動のデモンストレーションや授業の組み立て方の研究を進めていく。

ペアやグループ等の形態を効果的に取り入れることで、さらにコミュニケーション活動を意味のあるやりとりにしていく。